

CROWN English Communication I・II・III

の編集を終えて ～もう一步先に行く教科書を目指して～

慶應義塾大学 霜崎 實



1. はじめに

『CROWN English Communication I・II・III』のシリーズが完成を迎えた。新学習指導要領のもとに、内容・形式ともに一新し、基礎的なレベルから高度なレベルに至るまで、段階的に到達することができるように配慮した教科書の完成である。『I』では基本をしっかりと導入し、『II』では高校生として到達すべきレベルを目標とし、さらに『III』ではより高度な内容を盛り込み、入試レベルの英語にも対応できるものとなった。本稿では、シリーズが完結をみたこの段階で、その編集方針ならびに特長などについて述べてみたい。

2. 『CROWN』シリーズの編集方針

語彙や文法の習得は、英語学習の重要な基礎となることは言うまでもないが、「ことばの教育」は「内容」と切り離すことができない。ことばの教育にとって重要なのは、ことばで何を伝え、何を考えさせ、どのような心の変化をもたらすことができるのか、という点である。題材に登場する人物の経験やものの考え方や感性に触れることで、新たなものの見方や価値観を獲得したり、さらには人生における重要な選択をするきっかけとなることさえある。そのため、生徒の心に届く内容をもった題材を提供することが、英語教科書にとっての生命線であるといっても過言ではない。

「よい題材」とは何か？この問に対して、これこれの条件を備えていればよい題材となる、と明確に答えることはできない。しかし、良い題材を選定するための暗黙の了解のようなものが編集委員の間に共有されているように思う。そうした了解事項がいかなるものかと問えば、第1に、高校生の心に共感と感動をもたらすものという点が挙げられる。いわ

ば、読んでいくうちに引き込まれるような内容をもっていることである。とりわけ『I』レベルでは、そうした要素が入ることで英語学習への心理的な障壁を取り除き、学習意欲を高めることに繋がる。

第2に、高校生の知性に働きかけて、問題を観察したり、分析したり、解釈したりするような知的刺激を与える題材が望ましいという点が挙げられる。教科書とはかく規範的な立場から正しいことや事実のみを精選して提供していると捉えられがちである。しかし、ことばの教材に関しては、「教科書に書いてあることは常に正しい」といった思い込みは、無批判に内容を鵜呑みにするという悪癖に繋がる。教科書といえども、批判的に読んで考える習慣をつけることは、思考力の養成にとってきわめて重要である。強引に結論を押し付けるのではなく、問題発見を促すような提示の仕方が求められる。

第3に、現代に生きる若者ができるだけ広い視野に立ち、提示されている問題をさまざまな角度から捉えることができるよう、多様性に富んだテーマを扱っていることが望ましい。しかし、単に多くのテーマを扱えばよい、というものではない。選択されたテーマに対して複数の角度からアプローチすることによって、問題をより深く理解することができるような構成になっていなければならない。

以上を要約すれば、『CROWN』のシリーズを一貫して貫いている編集方針は「題材中心主義」と言えるのかもしれない。題材の良し悪しは決定的であると考えがゆえに、編集委員会では、持ち寄った題材候補を十分に吟味し、厳選された題材について、語彙・文法のフィルターをかけ、さらに文章として洗練されたものにするために、労苦を惜しまない。このことが、『CROWN』シリーズに対する大きな信頼に繋がっているものと確信している。

3. 共鳴し合う題材

前節では、英語学習にとってテーマの設定と問題への多角的なアプローチがいかに重要であるかについて述べた。同じテーマであっても、さまざまなアプローチ、さまざまな問題の切り口がある。『CROWN』シリーズでは、いわばスパイラル的に理解が進むように、切り口を変えつつ、テーマの重層的な扱いに配慮した構成となっている。関連した題材が「共鳴し合う関係」を作り出し、生徒が知らず知らずのうちに新たな気づき (awareness) を経験できることを期待しているのである。

以下、シリーズを通して扱ったテーマの中から「言語」「環境」「科学」「社会的な貢献／平和への貢献」「生き方／人生」を例にとって、重層的な提示の具体例を見ておくことにしよう (*以下、レッスンのタイトルに続く括弧内にあるI, II, IIIはそれぞれ教科書の『I』『II』『III』を表し、「L.～」は「第～課」を表す)。

まず、「言語」というテーマについては、“Writers without Borders”(I, L.3)⇒“Txtng—Language in Evolution”(II, L.5)⇒“Being Bilingual”(III, L.7)という繋がりを見て取ることができる。それぞれ、言語と文化の境界を超えて活躍する作家たち、携帯電話で使われるようになってきた新たな言語の特徴、二言語併用社会の実態などについて、「言語」を接点として語っている。

「環境」に関しては、“A Forest in the Sea”(I, L.2)⇒“Roots & Shoots”(I, L.6)⇒“Why Biomimicry?”(II, L.7)⇒“Green Revolution, Blue Revolution”(III, L.8)のような繋がりがある。それぞれ一見別のテーマのように見えながら、実は、「環境」とわれわれの生活のあり方との関係性を追求したものである。

「科学」という切り口からも、いくつかのレッスンが連携している。“Going into Space”(I, L.1)⇒“The Long Voyage Home”(II, L.9)⇒“The Magic of Reality”(III, L.6)は、宇宙飛行士若田光一さんの体験、宇宙探査機はやぶさについての物語、そして科学的思考のあり方をそれぞれ扱っている。

「社会的な貢献／平和への貢献」という観点から共通の接点をもつものもある。“Food Bank”(I, L.5)⇒“Crossing the Border”(II, L.4)⇒“Before Another 20 Minutes Goes By”(II, L.8)⇒“Only a Camera

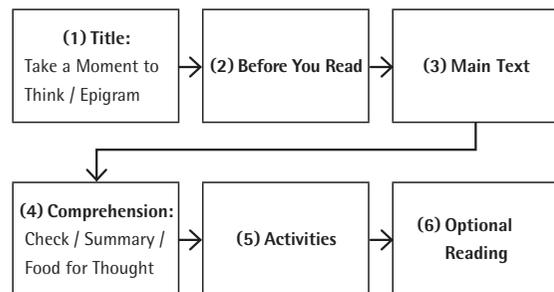
Lens between Us”(III, L.5)などがそれである。特に、“Crossing the Border”は国境なき医師団に参加した貫戸朋子さんの活動を、“Only a Camera Lens between Us”は国際紛争地域で働く瀬谷ルミ子さんの活動を紹介したものであるが、ともにグローバルな舞台において活躍する女性の国際貢献活動を扱ったものである。

「生き方／人生」について考えさせるレッスンもある。例えば、常に弱者への視点を忘れない『ピーナッツ』の作者チャールズ・シュルツ氏を扱った“Good Ol’ Charlie Brown”(I, L.10)、アフリカの最貧国において廃品を利用して風力発電機を作り上げた少年を扱った“A Boy and His Windmill”(II, L.1)、心臓外科医天野篤さんの一途な姿勢の背後にある想いに焦点を当てた“God’s Hands”(III, L.3)～スティーブ・ジョブズ氏が人生において何が大切なのかを若者に語った“Stay Hungry, Stay Foolish”(III, L.10)などは、それぞれアプローチは異なるものの、人間の生き方の根本を問う内容となっている。

この他にも、「芸術」「歴史」「伝統文化」「情報化社会」「スポーツ」「デザイン」など、多様なテーマのもとに、新鮮で知的刺激に満ちた題材を豊富に取り扱っている。英語という教科の面白さは、教材を通じて、自分の内面を深く見つめたり、あるいは広く世界へ眼を向けたりする経験をもつことができるという点にある。『CROWN』シリーズの最大の魅力の一つは、こうした経験を誘発するような高品質の題材が豊富に提供されているところにある。

4. 『CROWN English Communication III』の特長とは？

さて、本節では『CROWN』シリーズの締めくくりである『III』の特長について述べておきたい。『III』は、先行して刊行された『I』『II』とは基本コンセプトにおいても、レッスン構成においても異なっている。先行する2冊は、文法シラバスに則り、高等学校レベルの英語の基礎力をつけることに重点をおいた構成になっているのに対して、『III』は、いわば『CROWN』シリーズの到達点を示すものでもある。したがって、取り上げた英文にはかなり高度なものも含まれている。また、練習問題などの指示文についても、すべて英文での提示とした。しかし、何よりも大きな特長はレッスン構成にある。以下、構成を図示する。



(1) まずタイトルページにおいては、レッスンのテーマに関連した大判の写真を提示すると共に、Pre-reading 活動として〈Take a Moment to Think〉で英問を提示している。質問は生徒の知識を試すものではなく、レッスンを始めるにあたって生徒の興味を刺激し、背景知識を活性化するためのものである。また、エピグラム（警句）は、そのレッスンへの意味深長なコメントとなっているので、是非味わっていただきたい。

(2) 見開きの右ページには、〈Before You Read〉という比較的短いテキストが提示されるが、これは導入の役割を担っている。そのレッスンがどのような内容を扱うことになるのか、ざっと読むことでおおよその見当をつけることができる。加えて、そこで使われているキーワードを英文の定義とマッチングするクイズが提供されている。英英辞典に親しむきっかけになることを期待している。

(3) 本文は3～4セクションからなっており、それぞれ見開き構成である。脚注で簡単な内容把握問題が2～3題提供されているが、これは口頭でのやりとりで済ますことも可能である。各セクションの末尾には、True / False形式のリスニング問題を用意した。

(4) 本文の次に、〈Comprehension〉のページが続く。まず、〈Check〉では、本文の内容理解を総合的に確認するための問題が4問提供されている。この問題については、授業に先立ってレッスン全体に眼を通し、内容理解を確認するための宿題としてやらせてみてよい。〈Summary〉では、本文の内容を100語程度の英文でまとめる問題に取り組むが、段階的に難しくなるように配慮した。L.1-3では空所補充形式で、L.4-7では下線部分のみを部分作文する形式で、そしてL.8-10では与えられたキーワードを使って自ら文章にまとめる形式で要約を完成させることになる。最後に、〈Food for Thought〉では、生徒の思考力に訴えかけるような設問を用意した。

本文の内容について生徒が自らの経験や背景知識などを参照しながら、より深く本文の内容について考えるきっかけを与えることを目論んだものである。これには解釈や内省といった高度な知的作業が必要となることを想定し、敢えて日本語の使用を前提とした形で提供している（ただし、『Teacher's Book』ではその英語版もあるので、授業を英語で行う場合には、そちらを活用していただきたい）。

(5) 〈Activities〉は、『I』『II』にはない新しい試みである。本文の理解を前提としたうえで、生徒自身の立場から意見を述べる機会を提供したい、というのがこのセクションを設けた理由である。そうはいつでも、「意見を述べよ」と指示されたところで、英語で意見をまとめる方法がわからない、という生徒が少なくないことが想定される。そこで、あらかじめ意見を誘発するような仕掛けを組み込んでおくことにした。具体的には、複数のモデルとなるコメントを提示し、これを読ませることで、「ああ、こんな見方もあるのか」「この意見は的外れだな」「この意見には大賛成」といった反応を引き出したい。そのうえで、同じページに掲載した機能表現を参考にしながら、生徒が自分なりの意見や感想を英語で表出・発信する。本文の内容に賛同する場合もあれば、反対したい場合もあるかもしれない。いずれにしても、本文を読んで字面の理解だけで満足することなく、実は、そこから本当のコミュニケーション活動が始まるのだ、という考え方から、このセクションが生まれたのである。

(6) 一つのレッスンの締めくくりとして、『I』『II』と同様に、〈Optional Reading〉を設けた。これは本文のテーマと密接に関連した内容を扱ったものであるが、本課で導入されたテーマを別の角度から再考したり、知識の幅を広げたりすることができるような工夫が施されている。また、『III』では、より実践的な読解力を養成することができるように、『I』『II』にはない内容把握問題が用意されている。いろいろな活用の仕方が考えられるが、英文は比較的平易で読みやすいものを選んでいたので、これを速読用の教材として活用するのモ一案である。最後に、〈Focus on Reading〉というコラムを設けたが、そこではリーディングのためのヒントを提供している。単に漫然と読むのではなく、リーディングの「ツボ」を押さえて読むきっかけとなれば幸いである。

5. 共感を誘発する教科書

すでに述べたように、教科書の編纂にあたって編集委員会として心がけていることは、生徒の心に届く教材を提供したいということである。英語によるコミュニケーション教材を提供しようとするれば、生徒の共感や感動を引き起こすことがすべてのコミュニケーション活動の前提になると言ってもよい。さらに遡って共感の源を探れば、教科書編纂に関わる編集委員や教科書で取り上げた人々の心の中に生じた共感にまで行き着くかもしれない。ここでは、共感の重要性を示すいくつかのエピソードを紹介しておきたい。

ジェーン・グドール氏と言えば、チンパンジー研究における世界的な権威であるばかりでなく、若者の環境学習を推進する活動を世界的に展開している精力的な活動家としても知られる。筆者も言語学を専攻するものとして、動物のコミュニケーションについては強い関心を持ってきたが、そうした関心に導かれて彼女の著作に接することになった。このような背景から、グドールさんの考え方をインタビュー形式で紹介したのが、“Roots & Shoots”(I, L.6) というレッスンである。このレッスンは多くの学校で好評を得ているようであるが、ある学校では、このレッスンで学んだことをもとに、グドールさんに直接手紙を書く企画を実施した。教科書で紹介されている有名人に対して、手紙という手段で、しかも英語を使って相手に考えを伝えるというプロジェクトである。擬似的なコミュニケーションではなく、まさにauthenticなコミュニケーションの実践例である。筆者はグドールさんの日本での講演会に複数回参加させていただいたが、ある講演会の会場では、『CROWN』を片手にグドールさんのサインを求める女子学生の姿を見かけることもあったし、また別の講演会場では、高校生のグループが先生に引率されて、英語での講演に参加していたのを目撃している。題材に対する共感があってはじめて実現したことと思われる。

教科書編纂にあたって、そこで取り上げた登場人物とのコラボレーションが実現したことも複数回あるが、これもそうした方々の共感があってはじめて実現したことである。上に挙げたグドールさんについては、〈Optional Reading〉のために、“Message

for High School Students” という心のコもったメッセージを『CROWN』のために寄稿していただいた。自身のことばで語られるメッセージは何よりも力強く生徒の心に届く。また、国際宇宙ステーションで日本人初の船長として活躍されている若田光一さんから、若者へのメッセージをいただくことができた。これは“Going into Space”(I, L.1)の〈Optional Reading〉として掲載させていただいたが、「快適な空間の向こう」へ乗り出してチャレンジすることの大切さを訴えたもので、これにも心を打たれる若者が数多くいるに違いない。また、“Only a Camera Lens between Us”(III, L.5)で取り上げた瀬谷ルミ子さんから、“Design Your Own Life: A Message from Seya Rumiko”というメッセージをいただいたが、教科書の本文で読むのとは違った生の感動が伝わる力強いことばである。

また、別の形でのコラボレーションが得られたこともある“Crossing the Border”(II, L.4)で紹介した貫戸朋子さんには、本文の編集作業の過程で実際にお会いする機会に恵まれた。高校生へ伝えたいことがあればメッセージを、とご本人にお願いしたところ、教科書の57ページの結論で述べられているメッセージをいただくことができた。教科書のことばが説得力をもっているとするれば、それはもともとご本人の口から直接語られたことに端を発しているからに違いない。

6. おわりに

以上、教科書編纂にあたってのエピソードをいくつか紹介してきたが、教科書編纂の背後には、実に多くの方々のご協力があり、その結果として『CROWN』シリーズが実現しているということである。いずれの方々にも共通しているのは、人生の先輩として、自らの経験に基づいて、心からのメッセージを若者へ伝えたいという強い意志をお持ちである、という点である。編著者が意図したように、『CROWN』シリーズが生徒の英語コミュニケーションを誘発するような「もう一歩先を行く教科書」となっているとすれば、それは教科書の内容に共感し、若者を応援したいと思ってくださる善意の人々のお陰である。そうした方々の共感が生徒にまで伝わったとき、そこに本当のコミュニケーションの契機が生まれることになる。